

—特集—

情報

提供を

考える

ヤングアダルトへの情報提供

「たとえどんな良書であっても、強制は読書さらいを生む。」

「ヤングアダルトコーナー」

昭和55年7月、都立江東図書館に開設された。ヤングアダルトへのサービスも、全館で行なうのが

ナマミの人間のための情報

図書館は、意外に情報に弱い所である。本の形になったものには、関心を示すが、ナマミの人間のための情報にはうとい。

アメリカの図書館では、従来のレファレンス(参考調査)だけでなく、施設や人まで紹介する。リ

「情報講座」第一回(7月)は、ヤングアダルトコーナーの担当司書、半田雄二さん。第二回(8月)は、中野区児童青少年部の副主幹、中山弘子さんと、「中野の女性」担当の上岡延子さんを訪ね、お話を伺いました。

基本だが、「その年代へ顔を向けている」というPRと、「どこに本があるのかわからない」ヤングアダルトのために、コーナーを設けている。

ファラル(照会)サービスが強調されている。

市販の本の量と比較して、図書館の現在の蔵書の資料が、減かれることが多いが、利用する側に役立つ資料がどれだけ集まっているかという反省も必要である。

「ヤングアダルト」とは

「ヤングアダルト」とは、その名の通り、「もう子どもではない、おとなの世界に入ってきた人」と、とらえる考え方である。ヤングアダルトに対するサービスには、「おとなの世界に呼ばれていく」という考え方が必要である。

十代でとり逃した利用者は、もう、戻ってこない

年齢別に、登録者一人あたりの貸し出し冊数をみると、15歳ぐらいで典型的に落ちこんでいる。意

こんな新聞も発行しています

やんぐあだると 新聞

東京都立江東図書館

君の図書館に再登録
フル活用 5つのポイント

VIVA! フレッシュマン

この新聞は、受験戦争や、テレビ、学校の読書指導等、外部的要因ばかりでは片づけられない。「利用者の眼の高さ」でものを

欲があつて登録してはいても、実際には借りて行かないのだ。

そして、大人の利用は、登録は少ないが、登録者一人あたりの貸し出しは多い。これは、意欲のある人だけが残っていることを示している。十代でとり逃した、他の利用者は戻ってこないのが現状である。

この事態は、受験戦争や、テレビ、学校の読書指導等、外部的要因ばかりでは片づけられない。

見るのが、「子ども」でしか行なわれていない。だから、児童がある年齢に達した時、手に取りたくなる本が見つからない。又、図書館にヤングアダルト専門の担当もない。これら、図書館の内部的要因も反省すべきだ。

ヤングアダルトに知的自由を

本を読む権利は、誰にでもある。バイクの本を読むから暴走族、自暴の本を読んだから危ないというわけではない。

ところが、図書館における知的自由について、政治的なものに比べ、年少者に開くものは、日常的問題がでる。又、職員に対応し、彼らの要求にストレートに対応しない、親代りの対応しがちである。

これに対し、アメリカの図書館協会は、「我々がサービスマスターは、利用者個人であって、その子の親のためではない」とし、「ある本を読んでもいいか悪いかを言えるのは、その子の親であり、その親は、自分の子どもに対してだけ、そのことが言える」と宣言している。

図書館は、公の施設としては珍

らしく、目的意識表示をしなくて、プラ・と来て良い所だ。その時、ヤングアダルトが読みたいような本がないといけない。大人の目からみて、必要と思う本のみを押しつけてはいけない。彼らの読む本は、その成長のステップ、その年代にとって意味がある。又、個々の人間として、「今

広報誌「中野の女性」から学ぶ

「問題点がはつきりせず、視点がままでは編集はできません。」

「中野の女性」

昭和54年8月、創刊。中野区児童青少年部婦人問題担当、発行。今年度は、六千五百部を年4回発行し、区民等に配布している。

視点をもちことは編集の前提

国際婦人年と、世界行動計画は、男女平等に関する大きな展開をもたらした。このポイントには、従来の「女性の職業と家庭の調和」の論理から、性別役割分業の否定に

の段階をいかに充実させるべきか、も、大切にしたい。

「わかってくれる人がいる」という信頼感がある。『じゃあ、これもおもしろいかも』という信頼につながる。いつも、「歓迎するよ」という姿勢を示し続けることから出発したい。

「問題点がはつきりせず、視点がままでは編集はできません。」

の調和」については、男性の問題としても語られるようになった。

「中野の女性」の編集の視点は、1、婦人問題の問題点を明確にすること。

2、地域（中野）の広報誌としての位置づけを明確にすること。

3、読んでもらえるように、工夫すること。

視点をもちつことは、編集の前提である。視点、つまり問題点を明らかにすることが、もし一人でできないのなら、会議をもってテーマを煮詰める等の努力が、必ず必

要である。

民間の感覚を生かすために

編集は、タウン誌を発行している民間企業に、一部委託している。タウン誌を発行している中で、区民情報が豊富で、民間の感覚が生かせる。

しかし、行政としては、問題点がずれていたり、現象面だけを見てタウン誌風に書かれたりして困ることもある。

委託の場合、相手側の担当者を引きつづけてもらいたい。こちら側もよく勉強をしておかないと、こちらのつくりたいものが何かを、理解してもらえないことがある。念へりな打ち合せも必要である。

真の住民参加を

「中野の女性」では、「伝えたこと」がはつきりしている。編集における住民参加は考えていない。住民自身が出すものは、別に考えている。

よく、住民参加がテクニクとして利用されがただが、もっと、住民自らが育つような、本来の住民参加を考えたい。

〈文責・社会教育指導員 西村美東士〉